

オオクラ研究ノート：研究手法態様の推移

－視点を改めて－

大蔵 直樹 OKURA Naoki (2016 年入学、2021 年修了)

Rajagopalan(2015)¹は、論文の構成について IMRAD 形式を推奨している。オオクラの場合、従来は APA 形式にて論文を書いてきていたが、このところ特に指定のない限り、IMRAD 形式にそって展開している。本研究ノートの構成も IMRAD 形式にフォローする。Sentence 文頭に Heading をふるとともに、本文については paragraph writing を試みた。

1. Introduction (序)

『人』から『者』へ：約6年前に、職業人という『人』の領域から研究者という『者』のつく領域に足を踏み入れた。こうなるとは10年前には考えもしなかった。

そして面食らった：最初の頃は、ジャーナルに投稿すれば「随筆風」との指摘を受け、書き直しを命じられ驚いたものである。学会にて報告を行い、「興味深い」とのコメントをいただき、誉められたと思って喜んでた。しかし、そのコメントはアカデミズムの世界では「まだまだ。評価に値せず」という意味だと知って衝撃も受けた。

根拠は、と問いを立ててしまう：実務界とは全く異なる環境の中で研鑽を重ねるうち、最近では、問いを立てて考えるようになった。例えばテレビのニュースショーの中で、コメンテーターが語っていても「この人はどのようなデータを根拠にしているのだろうか？」と捉えることが多くなり、また新聞にて「～との指摘がある」と書かれていても、「誰が、どこで、どのような指摘をしているのだろうか？」と、その根拠の有無を意識するようになっている。

統計記述的問い：研究者として6年を過ごすうちに、統計記述的問いを必須と考えるようになった。新たな理論的概念の見出しあるいは理論化に向けての質的提唱は、明治大学大学院の中でも政治経済学研究科あるいは文学研究科における研究としては極めて価値あるものとする。しかし、オオクラの場合、商学研究科における6年間の研究生活により、統計記述的問いが、体に染みついてしまったのである。

大学で職を得るため：さて、最近、若い世代のポストドクの方々より切実な話を聞いた。「ポストドクが大学等にて職を得るためには、教員一人の募集に対して100倍を超える応募倍率を突破する必要がある」というのである。その選好においては「発表済み論文の評価が高いこと」が重要な要件となり、論文の評価が低い、という場合には応募書類をじっくり見られることもなくゴミ箱行き、すなわち即座に選外、ということも珍しくないとのことである。

1 Retrieved, October 15, 2021, from <https://editage.jp/insights/tips-for-writing-the-perfect-imrad-manuscript>

高い評価を得るため：そこで、論文の評価が高い、というのは具体的にはどのようにして判断されるのか、という点が問題なのである。若い世代のポストドクの方によると、「海外の impact factor (IF) の高いジャーナルへの投稿、ならびに、統計的手法が採用されていること」ということのようなのである。

研究手法と評価：オオクラの場合、自分の論文の評価を気にする必要がなく、ある意味自由気ままな研究が可能、ということになる。何故なら、「職を得る」ということに関しては考える必要がないからである。さはさりながら「世において高い評価を得ている基準にフォローしていない」ということは、論文内容の問題以前に「研究手法面から見て評価が低い」ということにつながってしまうのである。

2. Materials and Methods (材料と方法)

研究手法の推移：ここ 20 年間の研究手法の推移をみるため、『商学研究論集』第 55 号・第 56 号 (2021 年度)、『商学研究論集』第 35 号・第 36 号 (2011 年度)、『商学研究論集』第 15 号・第 16 号 (2001 年度)、『文学研究論集』第 55 号・第 56 号 (2021 年度)、『文学研究論集』第 35 号・第 36 号 (2011 年度)、『文学研究論集』第 15 号・第 16 号 (2001 年度)、と 10 年毎のそれぞれに収められた論文を研究材料とした。

3. Results and Discussion (結果と考察)

(1) 統計的分析手法採用の推移

商学研究論集に見る推移：推移の特徴の現れている商学研究論集の結果のみ図表 1. に記載する。

図表 1. 商学研究論集の研究手法の推移 (筆者作成)

	『商学研究論集』					
	2001a/c		2011a/c		2021a/c	
	第 15 号 (2001.9)	第 16 号 (2002.9)	第 35 号 (2011.10)	第 36 号 (2012.2)	第 55 号 (2021.9)	第 56 号 (2022.2.)
統計学的分析手法 採用割合 (%)	0.0	0.0	0.0	23.8	56.3	42.1

(2) 仮説検定の結果

仮説検定の実施：統計データの活用と統計学的分析手法について帰無仮説と対立仮説を設定し、仮説検定をおこなった (誌的余裕の関係から結果のみ記述する)。

2021 年度には対立仮説が支持：その結果、図表 2. に示す通り、2021 年度に帰無仮説

図表 2. 仮説検定の結果 (筆者作成)

	『商学研究論集』		
	2001a/c	2011a/c	2021a/c
帰無仮説 (H_0)	支持	支持	棄却
対立仮説 (H_1)	-	-	支持

の棄却、対立仮説の支持、という特徴が現れることを確認した。

(3) 解釈

統計データと統計学的分析手法の活用が主流に：統計データと統計学的分析手法もの活用が主流となっている。統計学的分析手法の活用は、商学研究論集の2011年度（第36号）に収容された論文から始まる。そして10年が経過し、今や5割を超える収容論文が統計学的分析手法も併せて活用する流れが鮮明となっている。

この流れは今後も一層加速する：IFの高いジャーナルへの論文投稿という研究スタイルがメイン・ストリームとなり、しかも許容ページ数がせいぜい20という制約もあることから、この傾向は今後もより一層加速すると考える。著書を重ねて一つのテーマを質的に分析していくという、今やクラシカルとも言える手法は、採用が難しくなっている。

改善の余地は大きい：統計学的分析手法の活用がメイン・ストリームとなっているという様子は確認できたものの、APAが推奨する基準の採用という面ではまだ論文の数は限られている。APA推奨手法をグローバル・スタンダードとして捉えるならば、明治大学大学院商学研究科の論文に関しては、まだまだ改善の余地は大きいといえることができる。

統計学的分析手法の活用のない文学研究論集：商学研究論集と同じ歴史をもつ文学研究論集についても、同スパンにて調査確認を行った。その結果、統計データの活用は行っているものの、統計学的分析手法の活用は1論文も確認できなかった。

4.Conclusion（結論）

統計学的分析手法：かつて、永野賢(1969)²が論文について、多くの読者を予想して書かれる文章であり、好意的な立場で読んでくれる人も、反対の立場で読む人もあり、読者のだれにも理解しやすい筋道の通ったものでなければならない、と述べた。その意味では、統計学的分析手法は多くの読者に説明力を持つと考える。

たやすく身に付けることができる：しかも、論文に活用するレベルを身に付けるためならば、1カ月程度もあれば可能という点も活用を加速させている理由の一つだと考える。

統計学的分析手法の限界：しかし、統計学的分析手法には限界がある。昨今の、何が起こるかわからない、という事象のもとでは、過去の統計データが存在せず、初期の対応が極めて困難になるのである。

『経済教室』の論文：「何が起こるかわからない」という視点を当てて考察しているか否かの確認を行った。対象は、2022年1月4日から2022年2月28日までの日本経済新聞の『経済教室』欄に掲載された論文38本である。確認した結果、「何が起こるかわからない」という視点を当てている

2 永野賢（1969）『悪文の自己診断と治療の実際』至文堂。

論文は1本だけであった。しかも考察の結果として、誰も「答えを持ち合わせていない」(Tooze,A、2022)と結論付けられていた。

共通する「備える」という視点：オオクラは、「いつ起きてもいいように」という事象への対応に関して、イタリアの Settala 医師が17世紀のペスト禍に対する「備え」に関し、関係者に具申していた内容に多くを学んでいる。Settala は、「万が一に備える」というスタンスから、*right, precise, and transparency* という三つの視点での情報収集を欠かさなかったのである。また、シニア研究者の高松様からいただいた資料には、古く奈良時代(8世紀)において天然痘の拡散への「備え」として「新しい生活様式」の採用という視点が現れる。その他に、「人新世」という地質学概念に注目し発展させた「必ずやってくる」との齋藤幸平(2020)³の提唱する視点にも学んでいる。これらの視点と、オオクラの「何が起こるかわからない」という視点とは、明らかに異なっているが「備える」という点では共通している。

パンデミック X への「備え」：様々な視点をフレームワークの中に取り込み、「いつ来るかわからず」、しかし「必ずやってくる」、そしてその時「何が起こるかわからない」パンデミック X に対する「備え」の重要性を提唱する論文を執筆中である。今後も研究者としての道を歩むことで、少しでも社会に貢献したいと考えている。

3 齋藤幸平(2020)『人新世の「資本論」』集英社。